

5種混合ワクチン定期予防接種にあたって

☆接種する前に必ずお読みください☆

1 5種混合ワクチン予防接種（DPT-IPV-Hib）について

ジフテリア（D）、百日せき（P）、破傷風（T）、急性灰白髄炎（ポリオ：IPV）、Hⁱb^f感染症（Hib）を予防するための5種を混合したワクチン接種をいいます。

2 ジフテリア、百日せき、破傷風、ポリオ、Hib感染症について

- ジフテリア ジフテリア菌の飛沫感染で起こります。感染は主にのどですが、鼻腔内にも感染します。ジフテリアは感染しても10%程度の人に症状が出るだけで、残りの人は症状が出ない保菌者となり、その人を通じて感染することもあります。症状は高熱、のどの痛み、犬吠様のせき、嘔吐などで、偽膜と呼ばれる膜がのどにできて窒息死することもあります。発病2～3週間後には菌を出す毒素によって心筋障害や神経麻痺を起こすことがあるため注意が必要です。
- 百日せき 典型的な百日せきは、普通のかぜのような症状ではじまります。続いてせきがひどくなり、顔をまっ赤にして連続的にせき込むようになります。せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音が出ます。熱は通常出ません。乳幼児はせきで呼吸ができず、くちびるが青くなったり（チアノーゼ）、けいれんが起きるあるいは突然呼吸がとまってしまうことなどがあります。肺炎や脳症などの重い合併症を起こしやすく、新生児や乳児では命を落とすこともあります。
- 破傷風 破傷風菌はヒトからヒトへ感染するのではなく、土の中などにいる菌が、傷口からヒトの体内に入ることによって感染します。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素のために、筋肉の強直性けいれんを起こします。最初は口が開かなくなるなどの症状で気付かれ、やがて全身の強直性けいれんを起こすようになり、治療が遅れると死に至ることもある病気です。患者の半数は本人や周りの人では気付かない程度の軽い刺し傷が原因です。土中に菌がいるため、感染する機会は常にあります。また、妊娠中の母親が抵抗力（免疫）をもっていれば出産時に新生児が破傷風にかかるのを防ぐことができます。
- ポリオ ポリオは「小児麻まひ」を呼ばれ、口から入ったポリオウイルスは咽頭や小腸の細胞で増殖します。小腸の細胞ではウイルスは4～35日間（平均7～14日間）増殖すると言われています。増殖したウイルスは便中に排泄され、再びヒトの口に入り抵抗力（免疫）をもっていないヒトの腸内で増殖し、ヒトからヒトへ感染します。ポリオウイルスに感染しても、ほとんどの場合は症状が出ず、一生抵抗力（終生免疫）が得られます。症状が出る場合、ウイルスの感染が血液を介して脳・脊髄へ広まり、麻痺と起こすことがあります。ポリオウイルスに感染すると100人中5～10人は、かぜ様の症状があり、発熱を認め、続いて頭痛、嘔吐があらわれます。また、感染した人の中で、約1000～2000人に1人の割合で手足の麻痺を起こし、一部の人には、その麻痺が永久に残ります。麻痺症状が進行し、呼吸困難により死亡することもあります。
- Hib感染症 Hib感染症は、ヘモフィルスインフルエンザ菌b型という細菌によって発生する病気で、インフルエンザ菌、特にb型は、中耳炎、副鼻腔炎、気管支炎などの表在性感染症の他、髄膜炎、敗血症、肺炎などの重篤な深部（全身）感染症（侵襲性感染症）を起こす、乳幼児にとって問題となる病原細菌です。Hibによる髄膜炎は平成22年以前は、5歳未満人口10万対7.1～8.3とされ、年間約400人が発症し、約11%が予後不良と推定されていました。最近ではHibワクチンが普及し、侵襲性Hib感染症はほとんどみられなくなりました。

※裏面も必ず読んでください。

3 接種回数と標準的接種スケジュールについて

【接種対象者】 第1期 生後2か月から生後90か月に至るまでの間にある者

【接種回数】 1期初回接種と追加接種を合わせて、合計4回皮下又は筋肉内に接種

【接種スケジュール】

●第1期初回 標準的な接種期間は生後2か月に達した時から生後7か月に至るまでに達した期間に、20日から56日（3～8週間）までの間隔において、3回接種する。

●第1期追加 初回接種終了後から6か月から18か月まで（6か月以上）の間隔において、1回接種する。

4 ワクチンの副反応について

主な接種部位の副反応として、注射部位紅斑（赤み）、硬結（しこり）、腫脹（はれ）などがあり、接種部位以外の副反応として発熱、気分変化、下痢、発疹、食欲不振などがあります。

重大な副反応としては、アナフィラキシー様症状（通常、接種後30分以内に出現する呼吸困難や重いアレルギー反応、ショック状態になるような激しい全身反応）、血小板減少性紫斑病、脳炎、けいれんなどが報告されています。

5 予防接種を受けることができない場合

○明らかな発熱（通常37.5℃以上をいいます）をしている場合

○重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな場合

○このワクチンの成分によってアナフィラキシー（通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や重いアレルギー反応、ショック状態になるような激しい全身反応）を起こしたことがある場合

○上記の他、医師が不適当な状態と判断した場合

6 接種を受ける際に、医師とよくご相談しなければならない場合

○心臓病、腎臓病、肝臓病、血液の病気、发育障害などで治療を受けている場合

○過去の予防接種で、受けた後2日以内に発熱があった場合、および全身性発疹等のアレルギーを疑う症状を起こしたことがある場合

○過去に免疫不全の診断がなされている場合および近親者に先天性免疫不全症の方がいる場合

○このワクチンの成分に対してアレルギーを起こすおそれがある場合

7 予防接種を受ける前の注意

○接種を受けるお子さんの日頃の健康状態をよく知っている保護者の方が連れていきましょう。

○受ける前のお子さんの体調や状態をよく観察しましょう。

○あらかじめこの説明書や送付した書類をよく読み、必要性や副反応についてよく理解しましょう。

○前日に入浴させて清潔にしておきましょう。

8 予防接種後の注意

○予防接種を受けたあと30分間程度は、医療機関でお子さんの様子を観察するか、医師とすぐに連絡をとれるようにしておきましょう。急な副反応が、この間に起こることがまれにあります。

○接種後、1週間は副反応の出現に注意しましょう。

○当日の入浴は問題ありませんが、接種部位はこすらずに清潔を保ちましょう。

○当日の激しい運動は避けましょう。

○接種後、接種部位の異常な反応や高熱、けいれんなど、体調の変化があった場合はすみやかに医師の診察を受けてください。

9 健康被害救済制度について

定期予防接種後、引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障がでるような障害を残すなどの健康被害が生じた場合には、国の審査会にて審議し、予防接種によるものと認定された場合に給付を受けることができます。定期予防接種後の副反応などが生じた場合には、下記までご連絡ください。

問い合わせ先： 関川村 健康福祉課 健康推進班 電話（0254） 64-1472 （直通）
